

Glosas Emilianenses 研究 III

Estudios sobre las Glosas Emilianenses III

太田 強 正
Tsuyomasa OTA

この「Glosas Emilianenses 研究III」は「Glosas Emilianenses 研究I・II」の続編である。

Glosas Emilianenses は970~980年の作といわれ、内容は宗教的なもので当時のラテン語で書かれているが、難しいと思われる語句には、注解 (glosas) が俗語で、つまり黎明期のスペイン語で付けられている。これが所謂 Glosas Emilianenses で、スペイン語の最古の記録である。

この小論においては引き続き、Menéndez Pidal の *Orígenes del Español* の巻頭にあるテキストを用い、黎明期のスペイン語を音韻、語形、文法の面から眺めることにする。これに際して、glosas だけではなく、ラテン語の地の文章にも注目していきたい。なぜなら、ここに書かれているラテン語は中世ラテン語であるが、あまり教養のない人によって書かれたと思われる、俗語 (つまり当時の話し言葉であった黎明期のスペイン語) の反映と思われる誤りが多数見られるからである。

これらを指摘・考察するために、ここでは各文章に番号を付けた。その代り、テキストの glosas に付けられている番号は省いた。

その他、テキストにあって、歴史言語学的考察には不要と思われる記号はすべて省いた。文字 (s) も現代風に改めた。

テキストの [] 内が所謂 glosas であるが、これは元は、ページの隅や行間に書かれたものである。訳文中の () は筆者の判断で、訳文を補うために付けたもので [] とは無関係である。

Item alius sermo

また別の説教

IV—1 Karissimi quotiens cumque ad eclesiam uel ad sollemnitatem martirum conuenti fueritis... cum Dei adiutorio implere contendite [tenete]

親愛なる者たちよ、教会や殉教者の祭典に集まる時はいつでも、神の助けをもって事を行うようにしなさい。

eclesiam: 正しくは *ecclesiam* である。この Glosas においては、*e* は *ae* の縮約形を表わすことが多いが、この *e* は *ultracorrección* であろう。(III—6 参照)⁽¹⁾

martirum: 正しくは *martyrum* である。ラテン語の *martyr* (殉教者) はギリシャ語の *μάρτυρος* から来ている。ギリシャ語の *υ* はラテン語では *y* で表わされるが、古い借用語では *u*、時代が下ると *i* で受け入れられた。(II—4 参照)⁽²⁾

implere: 正しくは *implere* である。この Glosas では、半母音を表わす *j* が母音に用いられている。(I—

4 参照)⁽³⁾

[tenete]: ラテン語の tenere の命令法二人称複数形がそのまま用いられている。前の contendite を説明していると思われるが contexto を考えずに注解を付けたようである。tenere と contendere (>contendite) が共有している意味といえば、「主張する」ぐらいであろうか。

IV-2 Sunt enim plurime, et præcipue [plus majus] mulieres, qui in ecclesia garriunt.

何故なら教会で叫び声をあげている人(助けを求めている人)は非常に多く、特に女性であるから。

plurime: plurimae であろう。

præcipue: 副詞の praecipue (特に) である。e は前述のように ae の縮約形である。

[plus majus]: III-18 に [plus maijus] という glosas が見られた。⁽⁴⁾ plus も majus も「もっと〜」を意味する副詞で、俗ラテン語においては数ある比較を表わす副詞の中から、plus と majus が用いられるようになった。⁽⁴⁾

ここでは plus も majus もそれぞれ前の præcipue を説明していると思われるが、適当ではない。

in ecclesia: 正しくは in ecclesia である。e については IV-1 で述べたように ultracorrección であろう。

garriunt: garrire は中世ラテン語で「叫び声をあげる」の意であろう。⁽⁵⁾

IV-3 Adtendat [katet] unusquisque [quiscataqui] ne munera accipiendo alterius causam malam faciat suam penam si injuste judicauerit;

贈り物を受け取り不正な裁きをして、他人の悪事を自分の苦しみの種にしないように各人気を付けるように。

不正な裁きをして良心の苛責に苦しむことなどないようにの意か。

[katet]: 現代スペイン語の cate (catar の接続法現在三人称単数) である。前の Adtendat を説明している。catar はラテン語の captare (捕える) から出た動詞で、古くは「気を付ける」の意があった。⁽⁶⁾ なお katet は語末の子音 t を保っている。

[quiscataqui]: 前の unusquisque を説明しており、やはり「各人」の意であろう。この語はラテン語の「各人」を意味する quisque にギリシャ語の前置詞 κατά に由来する cata (現代スペイン語の cada) が挿入された形であろう。

injuste: 正しくは injuste である。

IV-4 accipe pecunie lucrum et incurrit [kaderat] anime detrimentum.

お金を受け取れば、魂の敗北になります。

pecunie: 正しくは pecuniae である。

incurrit: 正しくは incurrit である。

[kaderat]: ラテン語 cadere (落ちる) のスペイン語的未来形(不定詞+haberの現在形)の三人称単数形である。現代スペイン語の caerá (<caer)。前の incurrit を説明しており、「落ちるだろう」の意。しかしこの場

合の *incurrit* の説明としては不適當であろう。

なお *kaderat* は母音間の *d* と語末の *t* をまだ保っている。

Ⅳ-5 *Non se circumueniat qui talis est [nonse cuempetet elo uamne ensiui];*

意味不明である。

[*nonse cuempetet elo uamne ensiui*]

nonse cuempetet: ラテン語の *competere* (一致する) から出た形であろう。ラテン語では *non se competet*, スペイン語では *no se compete* となるが、「自分自身を〜へ加えない」であろうか。

cuempetet はアクセントのかかる *ō* が *ō>o>ue* の規則的变化をしているが、語内にあるアクセントのかかる音節の次の音節の母音 (*vocal postónica interna*) の *e* は保たれている。

elo uamne: 現代スペイン語の *el hombre* である。*elo* はラテン語の指示詞 *ille* の単数対格 *illum* から出た男性定冠詞単数形である。現代スペイン語の冠詞は、単数形はラテン語の主格単数形から、複数形は対格複数形から来ているが、⁽⁷⁾ この *elo* は単数形であるのに対格から来ている。これは *navarroaragonés* (ナバラ・アラゴン方言) の特長の一つである。⁽⁸⁾ I-6 に *elo terzero diablo uenot* という *glosas* が見られた。⁽⁹⁾

uamne はラテン語の *homo* (人) の単数対格 *hōminem* から出た形であるが、アクセントのかかる *ō* が *ue* ではなく *ua* になっている。また、語末の *m* および *vocal postónica interna* の *i* を失っているほか、発音されなくなった *h* もつづられていない。

ensiui: スペイン語の前置詞 *en* にラテン語の再起代名詞 *se* の与格 *sibi* の付いたものであろう。⁽¹⁰⁾ *b* と *u* の混同に関してはⅣ-7 参照。

nonse cuempetet elo uamne en siui で「(そういう) 人を自分たちの仲間に加えない」の意か。

Ⅳ-6 *jn illo enim jmpletur quod scriptum est:*

なぜならその人において (聖書に) 書かれていることが成就されるからである。

jn, jmpletur: 正しくはそれぞれ *in, impletur* である。

Ⅳ-7 *jn quo iudicio iudicaueritis iudicauimini.*

君たちが判断したと同じ基準で我々も判断されるであろう。

jn: 正しくは *in* である。

iudicauimini: 正しくは *iudicabimini* であろう。*b* と *v(u)* の混同は、ラテン語の *v* (つづりの上では *u* と *v* は自由に交代し、発音上でも両方とも単独では [u], 他の母音を伴う場合は [w] と発音されていた) が、時代が下って4世紀ごろになると唇の丸まりが失われて [b] に極めて近く、正確には [b̥] と発音されるようになったことに起因する。(I-2 参照)⁽¹¹⁾

Ⅳ-8 Forsitam [alquieras] quando jsta prædicamus aliqui contra nos irascuntur et dicunt:

多分我々がこの様に言うと、ある人たちは我々に腹を立てて（次の様に）言うだろう。

Forsitam: 正しくは Forsitan である。ラテン語の語末の m は一般に失なわれ、スペイン語においては単音節語においてのみ n として残っている。⁴² この Forsitam は単音節語ではないが、このような音韻変化を背景にした ultracorrección であろう。

[alquieras]: Menéndez Pidal は aliudvis > * alid quaeras > alquieras と説明している。⁴³ 「何であれ」の意であろうか。前の Forsitam を説明していると思われるが適当とは言えない。

alquieras の下線部は ae > e > ie の規則的な変化をしている。

jsta: 正しくは ista である。

prædicamus: 正しくは prædicamus である。e が ae の縮約形として用いられている。(Ⅳ-1 参照)

irascuntur: 正しくは irascuntur である。

Ⅳ-9 jpsi qui hoc prædicant hoc implere dissimulant [tardarsan por jnplire];

こう言っている人々自身が、こうしようとはしない。

jpsi: 正しくは ipsi である。

prædicant: 正しくは prædicant である。(Ⅳ-7 参照)

implere: 正しくは implere である。

[tardarsan por jnplire]

tardarsan: tardarse han である。ラテン語の単一形未来にとって代わるスペイン語の複合形未来「不定詞 + haber」に再起代名詞 se が付いた形である。Ⅱ-7 には nafregarsan, Ⅱ-10 には alongarsan という形が見られた。⁴⁴

tardarsan は現代スペイン語に形をおき代えれば se tardarán である。

jnplire: 正しくは implere 「満たす、遂行する」であると思われる。不定詞の語末の e を保っているが、-ere 動詞が -ire に変っている。

tardarsan por jnplire で「遂行することに手間どる」、「なかなか行なわない」の意であろう。前の implere dissimulant を説明している。

Ⅳ-10 jpsi sacerdotes, presuiteres et diacones talia plura committunt [tales muitos fazen];

司祭や聖職者や助祭といった人々さえ、この種のもっと多くの（悪い）事を行っている。

jpsi: 正しくは ipsi である。

presuiteres: 正しくは presbyteres であろう。Ⅳ-7 と同様 b と v(u) が混同されている。

さらに、この語はギリシヤ語の πρεσβύτερος から来ているが、Ⅳ-1 と同様に r が i で表わされている。

[tales muitos facen]

tales: 現代スペイン語の tales (tal の複数形) と形も意味も同じである。

muitos: 現代スペイン語の muchos である。muitas (muchas) という形が III-16に見られた。⁶⁵⁾ ラテン語の -uit- は l が母音化して -uit- の過程を経て -uch- に変化して行くが⁶⁶⁾ ここでは -uit- の段階で留まっている。

fazen: 現代スペイン語の hacen (hacer の直説法現在三人称複数) である。

ラテン語の語頭の f は一般的に言って f->h->φ- の過程を経てスペイン語に至っているが⁶⁷⁾、現代スペイン語は h の段階をつづりに残している。古スペイン語においては [h] と発音されていた。⁶⁸⁾

さらに古スペイン語では、ラテン語の「母音+ce」は、[d̄ze] と発音され、この fazen のように ze でつづられるのが一般的であった。⁶⁹⁾

fazen の人称語尾 -en については、ラテン語の facere のような -ere 型の動詞が、-ere 型の動詞に吸収されたことにより、⁷⁰⁾ 本来 -iunt (直説法現在三人称複数) であったものが -en(t) となった。

tales muitos fazen で前の talia plura committunt を説明しており、「(彼らは) この様な多く (の事) をする」の意であろう。

IV-11 et quidam, fratres, alicotiens [alquandas beces] uerum est, quod pejus est.

そして兄弟たちよ、さらに悪いことには、(そのうちの) ある事はしばしば本当のことです。

quidam: quiddam であろう。

alicotiens: aliquotiens であろう。

[alquandas beces]

alquandas: aliquantas (aliquantus の女性形複数対格) から出た形で、n の後の t が有声化している。⁷¹⁾

beces: 現代スペイン語の veces (vez の複数形) である。この語はラテン語の vix の複数対格から来ている。語頭の b と v の混同については IV-7 参照。

第2音節の c は、IV-10で述べたように、z でつづられるのが普通であったが、ここではラテン語の c がそのまま用いられている。

alquandas beces で前の alicotiens を説明しており、「時々」の意であろう。

IV-12 Nam aliqui clerici et jnebriari se solent, et causas jnjuste subuertere [transtornare] et jn festiuitatibus causas dicere et litigare non erubescunt [nonse bergudian tramare].

なぜなら幾人かの聖職者たちはよく酔って不正に裁判をくつがえし、ふざけて訴訟をおこして争い、恥じることを知らない。

jnebriari: 正しくは inebriari である。

jnjuste: 正しくは injuste である。

[transtornare]: 現代スペイン語の trastornar である。第一音節の n と不定詞の語末の e を保っている。前の subuertere を説明しており、意味は現代語と同じ「ひっくり返す」。

jn: 正しくは in である。

[nonse bergudian tramare]:

nonse bergudian: 現代スペイン語の no se avergüenzan (彼らは恥じない) である。bergudian は古典ラテン語の verecundari (恥ずかしがる) から出た語であろうが、人称語尾を見ると名詞 verecundia から出た *verecundiari という動詞があったのかも知れない。いづれにしても所相動詞であるが、ここでは再起動詞になっている。

bergudian は語頭で v と b が混同されており (IV-7 参照), c も有声化している。さらに第二音節, つまり語内にあるアクセントのかかる音節の前の音節の母音 (vocal protónica interna) の e と語末の人称語尾子音 t が落ちている。

non はラテン語の形がそのまま用いられている。

nonse bergudian で前の non erubescunt を説明している。

tramare: 現代スペイン語の tramar (横糸を通す, たくらむ) であろう。意味が異なるが litigare を説明していると思われる。tramare は不定詞の語末の e を保っている。

nonse bergudian tramare で「彼らはたくらむことを恥じない」であろうか。

IV-13 Set num [certe] quid toti condemndandi sunt.....

しかし全部の人が非難されるべきであろうか.....

[certe]: 「たしかに」を意味するラテン語の副詞であるが、何を説明しているのか不明。numquid は一語である。

IV-14 Nos ipsos pariter [aduna] arguimus [castigemus];

私たちは、私たち自身を等しくとがめる。(べきである)

ipsos: 正しくは ipsos である。

[aduna]: ラテン語の副詞 ūnā (一緒に, 同時に) に前置詞 ad がついた形であろう。前の pariter を説明しており、やはり「等しく」の意であろう。

[castigemus]: ラテン語の castigare (戒める・罰する) の接続法現在一人称複数で「戒めよう」の意。前の arguimus を説明している。

IV-15 admoneo [castigo];

私は注意を促します。

[castigo]: ラテン語, スペイン語同形で、「私は戒める・懲らしめる」の意で, admoneo を説明している。

IV-16 jn diem iudicii duppliciter criminis [peccatos] reus esse timeo;

裁きの日に私は二重に罪に問われるのではないかと恐れる。

in diem iudicii: 正しくは in die iudicii であろう。ここでは前置詞 in が「～において」と静止を表わしているので、対格 (diem) ではなく奪格 (die) を用いるべきであろう。前置詞の後での対格と奪格の混同は、ラテン語の格体系崩壊の原因の一つであるが、俗ラテン語においてはこのケースのように、前置詞の後では対格のみが用いられるようになる。(I-5, II-11 参照)²⁴⁾

duppliciter: 古典ラテン語では dupliciter である。-pp- は強意の geminación であろう。

[peccatos]: ラテン語の peccatum (罪) から出た形である。前の criminis を説明している。peccatum は中性名詞なので複数形 (主格・対格) は peccata となるが、主格単数が -um で終る中性名詞は、中性という性そのものが消失すると、同変化 (第二格変) の主格単数が -us で終る男性名詞へと移っていった。²⁵⁾ そのため、peccatum の複数対格は peccata ではなく、peccatos となり、この形からスペイン語の pecados (<pecado) が出た。(スペイン語の名詞は単数・複数ともラテン語の対格から来ている)²⁶⁾

peccatos という形は、音韻的にも -cc- がまだ単子音化していない点、また母音間の t が有声化していない点で、ラテン語とスペイン語の中間的な形である。

IV-17 ad mensam cordis uestri offero [dico] legem diuinam, quasi [quomodo] Domini mei pecuniam [ganato].

私はちようど私が主の祭台に家畜を供えるように、君たちの心の祭台に神の掟を供える。

[dico]: dicare (捧げる) の直説法現在一人称単数である。前の offero を説明している。

[quomodo]: まったくのラテン語で「～のように」の意。前の quasi を説明している。現代スペイン語の como, cómo はこの quomodo から来ている。

[ganato]: ゴート語起源と言われる動詞 ganar²⁷⁾ の過去分詞から出た語で現代スペイン語の ganado (家畜)。母音間の t がまだ有声化していない。Du Cange の Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis (以下 GMIL と略す) には、Hispania 語として ganado およびこれに由来する ganata が見られる。²⁸⁾

この ganato は前の pecunia を説明しているが、pecunia (この語も pecus <家畜> から出ている) はここでは古典ラテン語の「財産、金銭」ではなく、中世ラテン語における「家畜」(pecunia viva) の意で用いられていると思われる。無論 pecunia は中世ラテン語においても「金銭」の意はある。²⁹⁾

IV-18 Christus cum uenerit sacerdotibus, ipseest exacturus [de la probatione] usuram [ela legem]
.....

キリストが司祭たちのところに現れるときには、彼自身が(その法の) 施行を果たすだろう。

ipseest: ipse est である。

[de la probatione]:

la (女性単数定冠詞) はラテン語の指示詞 ille の女性形 illa から来ており、古くは ela であった。ela の aféresis が現代スペイン語の la であるが、de la probatione は前置詞 de の後で aféresis がおきている。前置詞が前にない場合は navarroaragonés (ナバラ・アラゴン方言) では、次に記す ela legem のように完全形 ela が用いられていた。³⁰⁾ (IV-5 参照)

probatione はラテン語の probatio (試み) の単数対格 probationem の語末子音 m の欠落した形であろう。
現代スペイン語の probación はこの語から来ている。

de la probatione は「試みの」あるいは「試みによって」の意であるが、何を説明しているのかは不明。

[ela legem]: ela は定冠詞女性単数形 (前述) であるが, legem はラテン語の lex (法) の単数対格形がそのまま用いられている。現代スペイン語の ley はこの対格の語末子音 m と母音間の g が欠落した形 *lee の語末の e が disimilación によって閉じたものである。⁸⁹

ela legem は語句の説明ではなく、前の usuram を意味的に補っていると思われる。

IV—19 Saluatoris p̄cepta jnsinuo [jocastigo]

私は救い主の掟のことを言っている。

p̄cepta: 正しくは p̄aecepta である。ē が ae の縮約形として用いられている。(IV—2 参照)

jnsinuo: 正しくは insinuo である。

[jocastigo]: jo castigo である。

jo: 現代スペイン語の yo (私は) である。ラテン語の ego から出た形であるが、IV—18 で述べたと同様に母音間の g が欠落している。j の音価はラテン語の j と同じ [j] であったと思われる。

castigo: IV—15 と同じ glosa であるが、中世スペイン語の castigar には advertir (警告する) の意もある。⁹⁰

jo castigo で「私は警告する」の意か。前の jnsinuo を説明していると思われるが、適当とは言えない。

IV—20 qui et nobis tribuat libenter [uoluntaria] audire quod predicamus.....

意味不明である。

[uoluntaria]: 現代スペイン語の voluntariamente (自発的に) であろう。前の libenter を説明している。Menéndez Pidal も mientras (mente) が省略されていると解している。⁹¹

predicamus: 正しくは praedicamus である。

IV—21 adjubante domino nostro Jhesu Christo cui est honor et jmperium cum patre et Spiritu Sancto jn secula seculorum [conoajutorio de nuestro dueno, dueno Christo, dueno Salbatore, qual dueno get ena honore, equal duenno tienet ela mandatjone cono Patre, cono Spiritu Sancto, enos sieculos delo-sieculos. Facanos Deus omnipotes tal serbitjo fere ke denante ela sua face gaudioso segamus, Amem].

我らの主イエス・キリストの助けをもって。ほまれと支配は父と聖霊と共に世々に至るまで彼のものである。

abjubante: 正しくは adjuvante である。b と v の混同についてはIV—7 参照。

Jhesu Christo: 正しくは Jesu Christo である。Jhesu は Christo の h からの類推であろう。一種の ultracorrección と考えられる。

imperium: 正しくは imperium である。

in: 正しくは in である。

以下 [] 内の glosas が長いので [] は省略する。

conoajutorio de nuestro dueno, dueno Christo, dueno Salvatore,

conoajutorio: cono ajutorio である。cono は前置詞 con と navarroaragonés の男性単数定冠詞 elo の結合した形である。con の後では、IV-18で述べた aféresis おおきているだけではなく、I も前置詞 con の n に同化されている。⁶¹⁾

ajutorio はラテン語の adjutorium (援助) から出た語であろう。母音間の t はまだ有声化していないが、dj>j, -um>-o の変化はしている。なお現代スペイン語ではこの語から直接出ている語はないが、古語には ayudorio という形がある。⁶²⁾

nuestro dueno, dueno Christo,: nuestro はラテン語の nōstrum (nōster の単数対格) から規則通りの変化をして現代スペイン語と同形になっている。

dueno はラテン語の dōminus (主人) の単数対格 dōminum から dōminum>dōminu>dōmno>dueno と変化したと思われる。ここでは dueno が二度くり返されており、「我らの主、主キリスト」となっている。

Christo はラテン語の ch が保たれている。

dueno Salvatore,: 「主たる救い主」の意。Salvatore は、ラテン語の salvator (救い主) の単数対格 salvatorem から出た形であろうが、b と v の混同が見られる。(IV-7 参照) また母音間の t がまだ有声化しておらず、語末の母音 e も保たてている。現代スペイン語の Salvador である。

cono ~ Salvatore で「我らの主、主キリスト、主なる救い主の助けをもって」の意で、ラテン文の adjuvante ~ Jhesu Christo を説明しているが、ラテン文には dueno Salvatore にあたる語はない。

qual dueno get ena honore,

qual dueno: qual はラテン語の qualis の単数対格 qualem から出た形で現代スペイン語の cual である。ここでは関係形容詞として用いられている。qual dueno で「その主(しゅ)は」の意。

get ena honore: get はラテン語の est (esse 直説法現在三人称単数) で、現代スペイン語の es (<ser) である。ēst>*ēt>get と変化し、g は [j] の音価をもっていたと思われる。⁶³⁾ g は古典ラテン語においても、前舌母音の e, i の前では前よりに発音されていたが、4世紀頃までには [j] と発音されるようになっていた。⁶⁴⁾

なお現代スペイン語の es (<ser) の e は、ラテン語のアクセントのかかる ē から出ているにもかかわらず ie と二重母音化していないが、ここでは ē>ie の規則通りの変化が見られる。

ena は前置詞 en とラテン語の指示詞 ille の女性形 illa から出た女性単数定冠詞 ela の結合した形である。前置詞の後での aféresis については IV-18 参照。

honore はラテン語の honor (ほまれ) の単数対格 honorem の語末子音 m が欠落したものであろう。現代スペイン語の honor であるが、ここでは女性名詞になっている。

qual dueno get ena honore で「その主(しゅ)はほまれの内にある」の意で、構文を変えているが、ラテン文の cui est honor を説明している。

equal duenno tienet ela mandatjone cono Patre, cono Spiritu Sancto, enos sieculos delosieculos.

equal duenno: 「そしてその主(しゅ)は」の意。equal は e qual である。qual は前述のように関係形容詞。e はラテン語の et (「そして」を意味する接続詞) の t が欠落した形である。

duenno は前述の dueno と同様にラテン語の *dōminus* の単数対格から出ているが、dueno とはやや異なり、*dōminum* > *dōminu* > *dōmno* > duenno と変化したと思われる。つまり語内にあるアクセントのかかる音節の次の音節の母音 (vocal postónica interna) の i が消失したために生じた⁸⁹⁾ -mn- という発音しにくい子音の連続を dueno は -mn->-n- (縮約), duenno は -mn->-nn- (同化) として解決している。現代スペイン語では dueño である。

tienet: 現代スペイン語の tiene (<tener) で、ラテン語の *tēnēre* (保つ) の直説法現在三人称単数 *tēnet* から出た形である。アクセントのかかる母音 ē は、規則通り ie に変化しているが、語末子音 t はまだ保たれている。意味は現代スペイン語と同じで、「(その主は) もっている」。

ela mandatjone: ela は前述の通りラテン語の *illa* から出た女性単数定冠詞である。mandatjone はラテン語の *mandatio* (中世ラテン語では「支配」の意味がある)⁹⁰⁾ の単数対格 *mandationem* の語末子音 m が欠落した形であろう。ここでも i が j で表わされている。この *mandatio* からは中世スペイン語の *mandación* (司法権) が出ている。⁹¹⁾

cono Patre, cono Spiritu Sancto,: cono は前述のように前置詞 con と navarroaragonés の男性定冠詞単数 *elo* の結合した形である。Patre はラテン語の *pater* (父) の単数対格 *patrem* の語末子音 m の欠落した形であるが、t はまだ有声化していない。

Spiritu Sancto はラテン語の *Spiritus Sanctus* (聖霊) の単数奪格形がそのまま用いられている。ラテン語の前置詞 *cum* (スペイン語の con) が奪格を支配するためであろう。

enos sieculos de losieculos: enos は、前述の *ena* が前置詞 *en* と女性単数定冠詞 *ela* の結合形であるのに対して、前置詞 *en* と男性複数定冠詞 *elos* の結合した形である。*elos* はラテン語の指示詞 *ille* の複数対格 *illos* から出た形である。ここでも前置詞の後での *aféresis* 及び、n と l の同化がおこっている。

sieculos は、ラテン語の *saeculum* (時代) の複数対格 *saeculos* から出た形で、現代スペイン語の *siglos* である。アクセントのかかる *ae* は規則通りに *ie* に変化しているが、-c- はまだ有声化していない。また *vocal postónica interna* の u も保たれており *cultismo* である。⁹²⁾

de losieculos は、de los sieculos であろう。los は前述の様に *elos* の *aféresis* である。

equal duenno ~ delosieculos で「そしてその主(しゅ)は世々に到るまで父と聖霊とともに支配権をもっている」の意で、構文を変えているがラテン文の *et imperium ~ in secula seculorum* までを説明している。

以下はラテン文にはない「祈り」である。Martín Alonso の *Evolución Sintáctica del Español* を参考にしている。⁹³⁾

Facanos Deus omnipotes tal serbitjo fere ke delante ela sua face gaudioso segamus. Amem.

全能の神が、我々をしてその御前で喜ぶを得しめ給わんことを、アーメン。

Facanos: 現代スペイン語の *Háganos* (*hacer* の接続法現在三人称単数 + 人称代名詞 *nos*) である。Faca はラテン語の *facere* (する) の接続法現在三人称単数 *faciat* から出た形である。ラテン語の語類の f は一般的に

言って f->h->φ- の過程を経て現代スペイン語に至っている。(II-5 参照)⁴⁰⁾

faciat の下線部 yod は、活用語尾に yod を含まない大部分の現在活用形(直説法現在一人称単数と接続法現在の全人称以外)との類推が働いて -ca- となった。⁴¹⁾ なお Faca は語末の子音 t を失っている。

Deus omnipotes: Deus (神) はラテン語の形がそのまま用いられている。

omnipotes は、ラテン語の omnipotens (全能の) から出た形である。ラテン語の -ns- は -s- となるが、この変化が omnipotens のように、スペイン語には残らなかった現在分詞主格にも見られる。⁴²⁾

tal serbitjo: 現代スペイン語の tal servicio である。serbitjo は、ラテン語の servitium (奉公・屈従) と同形の単数対格の語末子音 m の欠落した形から出ている。語尾 -ium は -ium>-iu>-io の変化をしているが t はまだ擦音化していない。v と b の混同に関しては IV-7 参照。

fere: ラテン語の facere から出た形で、現代スペイン語の hacer である。III-4 にも同じ形が見られた。⁴³⁾ 語頭の f に関しては前述の通りである。

ke: ラテン語の関係代名詞 qui の単数対格 quem の語末子音 m の欠落した形であろう。現代スペイン語の que であるが、この ke というつづりによって que(m) が [ke] と発音されていたことがわかる。

この ke は tal serbitjo と同格の関係代名詞節を導いていると思われる。

denante ela sua face: denante は de に後期ラテン語の inante (正面に) に由来する enante が結合した形で、n の disimilación によって現代スペイン語の delante (前方に) となった。ここでは前置詞として用いられている。なお、inante は古典ラテン語の ante (前方へ、以前に) から出た形である。⁴⁴⁾

ela は IV-18 で述べたように女性単数定冠詞であるが、ここでは前置詞の後でも完全形が用いられている。

sua はラテン語の所有形容詞三人称女性形 sua の単数対格 suam の語末子音 m の欠落した形であろう。現代スペイン語の suya である。

face はラテン語の facies (顔) の単数対格 faciem から出た形であろう。古スペイン語においては IV-10 で述べたように、「母音+ce」は [dze] と発音され ze でつづられるのが一般的であったが、ここではラテン語的な ce がそのまま用いられている。語頭の f に関しては前述の通りである。

なおラテン語の facies からは、スペイン語の faz, haz (二語とも「顔」の意) の doblete が出ている。

gaudioso segamus: gaudioso はラテン語の形容詞 gaudiosus (喜ばしい) の男性複数対格 gaudiosos の語末の s が落ちた形であろう。この gaudiosus から現代スペイン語の gozoso (喜ばしい) が出ている。

segamus は現代スペイン語の seamos (ser の接続法現在一人称複数) である。ser の接続法現在の活用は、ラテン語の sedere (座る) の接続法現在から来ている。segamus は sedere の接続法現在一人称複数 sedeamus の変化した形であり、seyamus と発音されていたと思われる。(III-5 参照)⁴⁵⁾ g の音価については前述の get で触れた。

Amem: 正しくは Amen_u である。IV-8 で述べた Forsitam と同じく ultracorrección であろう。

注

- (1) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究22, p. 34~35
- (2) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究21, p. 47
Väänänen, Veikko, Introducción al Latín Vulgar, p. 73
- (3) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, ロマンズ語研究21, p. 44
- (4) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, ロマンズ語研究22, p. 39

- Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 368
- (5) Du Cange, *Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis* IV 「(トルコ人が戦いの時に敵を威圧するために) 叫び声を発する」とあるが、ここでは表記のように解した。
- (6) Alonso, Martín, *Diccionario Medieval Español* Tomo I
- (7) Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 259
- (8) idem, *Orígenes del Español*, p. 332
- (9) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, *ロマンス語研究*21, p. 45~46
- (10) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 340
- (11) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, *ロマンス語研究*21, p. 44
- (12) Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 166
- (13) idem, *Orígenes del Español*, p. 370
- **alid quaeras* の *quaeras* はスペイン語の *querer* の語源になっている *quaerere* の接続法現在二人称単数で、古典ラテン語で「欲する」を意味する *vis* (<*velle*) の代りに用いられている。(*は推定形を示す)
- (14) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, *ロマンス語研究*21, p. 48~49
- (15) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 II」, *ロマンス語研究*22, p. 38
- (16) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 280~283
- (17) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, *ロマンス語研究*21 p. 48
- Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 121~124
- (18) Macpherson, I. R., *Spanish Phonology*, p. 126
- (19) Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 284
- (20) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 298
- (21) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, *ロマンス語研究*21, p. 45, p. 50
- Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 205~206
- (22) Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 214
- (23) *ibid.*, p. 205
- (24) Corominas, Joan, *Diccionario Crítico Etimológico de la Lengua Castellana*
- (25) Du Cange, *Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis* IV, p. 22
- (26) *ibid.*, VI p. 239
- (27) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 332~333
- (28) Macpherson, I. R., *Spanish Phonology*, p. 124
- (29) Alonso, Martín, *op. cit.*, Tomo I
- (30) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español* p. 370
- (31) *ibid.*, p. 332~333
- (32) Alonso, Martín, *op. cit.*, Tomo I
- (33) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 358, p. 48
- (34) Macpherson, I. R., *op. cit.*, p. 104
- (35) *vocales postónicas internas* は一般に消失している。(Menéndez Pidal, Ramón, *Gramática Histórica Española*, p. 75)
- (36) Du Cange, *op. cit.*, V, p. 211
- (37) Alonso, Martín, *op. cit.*, Tomo II, p. 1350
- (38) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 520
- (39) Alonso, Martín, *Evolución Sintáctica del Español*, p. 83~84
- (40) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究 I」, *ロマンス語研究*21, p. 48
- Menéndez Pidal, Ramón, *Manual de Gramática Histórica Española*, p. 121

- (41) *ibid.*, p. 290~291
- (42) Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, p. 307
- (43) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究Ⅱ」, *ロマンス語研究*22, p. 32~33
- (44) Corominas, Joan, *op. cit.*, *delante* の項
- (45) 拙稿「Glosas Emilianenses 研究Ⅱ」, *ロマンス語研究*22, p. 34

参考文献

- Menéndez Pidal, Ramón, *Orígenes del Español*, Espasa—Calpe, Madrid, 1976
Idem, *Manual de Gramática Histórica Española*, Espasa—Calpe, Madrid, 1973
Ministerio de Educación y Ciencia, *Las Glosas Emilianenses*, Madrid, 1977
Lapesa, Rafael, *Historia de la Lengua Española*, Gredos, Madrid, 1980
Macpherson, I. R., *Spanish Phonology*, Manchester University Press
Väänänen, Veikko, *Introducción al Latin Vulgar*, Gredos, Madrid, 1975
Lausberg, Heinrich, *Lingüística Románica I*, Gredos, Madrid, 1972

辞書

- Du Cange, *Glossarium Mediae et Infimae Latinitatis*, Forni, Bologna, 1981
Corominas, Joan, *Diccionario Crítico Etimológico de la Lengua Castellana*, Gredos, Madrid, 1974
Diccionario Ilustrado Latino—Español Español—Latino, Bibliograf, Barcelona, 1974
Alonso, Martín, *Diccionario Medieval Español*, Universidad Pontificia de Salamanca, 1986
Corripio, Fernando, *Diccionario Etimológico General de la Lengua Castellana*, Bruguera, Barcelona, 1973
田中秀中, *Lexicon Latino—Japonicum* (羅和辞典), 研究社, 東京, 1981
Oxford Latin Dictionary, Oxford University Press, New York, 1984
Real Academia Española, *Diccionario de la Lengua Española*, Espasa—Calpe, Madrid, 1984
Pabón, J. M., *Diccionario Manual Griego—Español*, Bibliograf, Barcelona, 1975